

去る2月13日から15日までの3日間、佐賀県唐津市では「子どもの居場所づくり」、長崎県平戸市では「観光のまちづくり」について視察しました。

唐津市は1市7町1村が合併し、人口13万5千人と旧市の2倍になっています。次代を担う子ども達の環境を良好にするため、地域の人々の力を結集して、子ども達が豊かな体験学習や安心できる遊び場を市内18ヶ所の公民館や小学校で、週1日、2日実施されていました。

中でも商店街の空店舗を活用して、中学生が中心の自主活動や、宅老所でのお年寄りとの交流は、子ども達を随分成長させるとのこと。問題は国委託事業のため、その後の対応や居場所に関心の無い子の扱いで、「出前」を計画し、より多くの子ども達に様々な体験学習ができるよう構想されていました。

平戸市は昨年1市2町が合併し、人口約4万人の新市で、日本最初の海外貿易港として歴史の香り豊かな町です。観光客数は約13.2万人、8年間連続して増加傾向にあります。

総務文教委員会

委員会の活動報告

―2委員会の行政視察を報告します―

傍聴できます 本会議

定例会市議会は、年4回開かれています。この本会議はどなたでも傍聴することができます。一般の定員は43人、車椅子定員は2名です。皆さんぜひ、傍聴ください。次は6月に定例会市議会が開かれます。

市議会ホームページ

総社市議会のホームページでは、過去の本会議の会議録や次の議会の日程などを載せています。ぜひ、ご覧ください。

- ・議会のしくみ
- ・定例会の会期日程
- ・請願・陳情
- ・委員会構成
- ・議会だより
- ・傍聴案内
- ・議員名簿
- ・会議録検索

観光協会では、漁協との連携で「平戸ひらめまつり」の定着、町歩道をテーマにした「平戸温泉・城下離まつり」の40日以上長期イベント、教会めぐりツアー、県観光連盟との連携で食の魅力（グルメ）と平戸温泉のPRもマスメディアとタイアップしており、年間40回以上のイベントが計画されて懸命な努力が同われしました。高齢化率が26%の現状、人づくりのために生涯学習の「平戸じのもん学のススメ」講座修了生が、ガイドとして活躍するなど、各所に創意工夫が凝らされていて感銘しました。

この度の視察を参考にし、本市の教育、観光行政に生かしたいと思っております。



城跡に建てられている平戸市役所

経済水道委員会

新しい委員会メンバーになって初めての行政視察。委員、事務局、執行部の計7名で2月13日から15日に、赤米を通じて交流のある南種子町、世界遺産の屋久町で行った。現在、赤米が栽培されているのは対馬多久頭神社、総社市新本司神社と種子島の宝満神社の3箇所。咲く花が違っているから渡来した道はそれぞれ違っているという。

ミニ独立村「赤米のふるさと」千石村の羽生村長が「いねと稲作・米について」その歴史・文化など研究成果を熱く語ってくれた。赤米が文化財に指定され種子の持ち出しができないので、現在栽培されているのは「ベニロマン」という改良品種。栽培しているのは8名、面積は約2ha、焼酎工場へ米麹原料、お菓子用、お土産などへ出荷されているようだ。また、種子島は昔は鉄砲伝来の地として、今は宇宙に一番近い町「ロケットの町」として観光資源も豊富だ。

一方、屋久町も近年「世界遺産の登録（平成5年）」で観光客が増えている。交通の便も良くなり種子島と屋久町で約60万人といわれている。

「世界的にも珍しい特異な自然環境」を有し、「植物の宝庫」ともい



総社市への視察状況 (平成17年度)

総社市議会には、全国の自治体から調査・研究のため、さまざまな目的をもって視察に来られています。平成17年度には7つの県・市・町の議会が視察されました。

月 日	議 会 名	調 査 事 項
平成17年 4月15日	埼玉県八潮市	議会運営について
5月12日	山口県秋穂町	市町村合併による在任期間中の議会運営について
7月20日	福岡県甘木市	議会運営について
8月22日	静岡県磐田市	国民宿舎サンロード吉備路について
平成18年 1月25日	福岡県古賀市	議会運営について
1月26日	大分県議会	市町村合併に伴う諸問題について
2月 8日	熊本県玉名市	合併後の事務(保健福祉部)について



赤米のルーツが保存されている「たねがしま赤米館」

われている屋久島は、樹齢7200年の縄文杉をはじめ樹齢数千年のヤクスギ1000本、その他樹齢5600年のコスギを含め19183本。九州最高峰の宮之浦岳など1000mを超える峰々が46座あり登山・山歩きが魅力だ。

しかし、これらが財政へ直接的に反映されないことが課題だという。また、高齢化が進んでいるが都会からの「イターン」が結構あり、種子島では「サーファー」、屋久島では山や海のガイド業者が移住しているそう。サーファーが農業の後継者として地域に根ざし育っているそう。島を大切に地域の伝統文化芸能を愛する島民は、若者の受け入れも温かいからだろう。